

しず老施協

No. 42

平成27年2月発行

静岡県老人福祉施設協議会

〒420-0856 静岡市葵区駿府町1-70
静岡県総合社会福祉会館内

TEL. 054-653-2311 FAX. 054-653-2312

E-mail: sizurossi@vesta.ocn.ne.jp

http://www.shizu-roshikyo.jp/

巻頭言

静岡県老施協副会長に就任して



静岡県老人福祉施設協議会
副会長

村松勝子

平成26年度から静岡県老施協副会長を務めさせていただいております、特別養護老人ホーム高麓施設長の村松勝子です。これまでは委員の立場で静岡県老施協にかかわらせて頂いておりましたが、このような大役を仰せつかり、まさに身の引き締まる思いです。

静岡県も含め、全国の自治体では団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に地域包括ケアシステムの構築を目指していますが、平成12年の介護保険制度発足時には特養など施設を中心とした地域福祉の考え方が主流だと記憶しています。もちろん、当時も「施設から在宅へ」という考え方はありましたが、スローガンのなものにとどまっていた気がします。それがこのように大きく変化してきたのは、近年の人口急減や超高齢社会の問題が介護保険の財源に大きく影響したためでしょう。

そうした背景もあり、2015年度からの介護保険改定では制度が根幹から見直されようとしています。先般には介護サービスの価格基準となる介護報酬を2015年度から2.27%下げることが正式に決まりました。9年ぶりのマイナス改定です。利用料や保険料の負担は軽くなる反面、事業者の収入は激減となります。介護人材不足が深刻な状況に補填すべく介護職処遇改善加算が上がりはしたものの、経営環境の低下は今後じわじわと押し寄せて来るでしょう。また内部留保が取りざたされておりますが、地域に認知される法人として位置づけて行くには社会福祉法人として地域公益活動に係る責務を自覚して行かねばなりません。

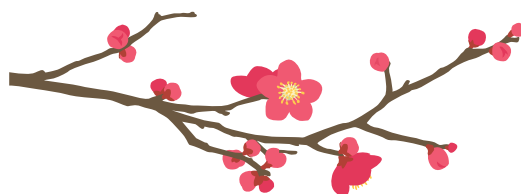
静岡県老施協では、このような社会環境等の変化を念頭に置き、会員の皆様がどのように対応したらいいのかが協議する場になると思いますが、私のような未熟者には制度改定への対応問題は荷が重く、皆様のお役にたてることは少ないと思われます。とはいえ、静岡県老施協が会員の皆様にとってさらに魅力ある組織として継続していくには、県独自の取り組みも必要になってきます。「高齢者福祉研究大会」等、現場で日々職務に取り組む職員の成長の糧となり、介護現場に新しい波紋を呼べるような企画考案の一助になればと思っています。

末尾になりましたが、一人の力は微々たるもので、会員の皆様お一人おひとりのご意見や行動が、静岡県老施協という組織を動かす大きな原動力となります。傍観者の立場でなく、其々の会員の皆様が主体的な参加意識を持つことで必ず変化をもたらすはずです。

是非とも会の活動に積極的に参加していただければ幸いです。

今後ともよろしくお願い致します。

(特別養護老人ホーム「高麓」施設長)



特集 1

[第6回高齢者福祉研究大会優秀発表事例の紹介] その2

前号に引き続き優秀発表者の皆さんから報告していただきます。

自己表現に聴く ～こころの聲がきこえた～

ケアハウス あんしんの里

ケアワーカー 庄 司 尚 美

ケアワーカー 山 下 博 子

ケアワーカー 米 倉 有里子

あんしんの里 ショートステイでは、平成25年2月から、レクリエーションの活性化の為に「コラージュ法」が導入されました。

「コラージュ法」とは、雑誌などから自由に絵や写真を切り取って、画用紙に貼り付ける、自己表現法の一つです。

見たことも、聞いたこともないレクリエーションに、最初、ご利用者はもちろん、職員もとまどいました。しかし、コラージュ法を進めていく中で、ご利用者に変化がみられることに気がついたのです。

集中力の継続や、不穏の強い方がコラージュ法実施後はとても穏やかな表情をみせる等です。

また、ご利用者のコラージュ作品に触れ、職員も、ご利用者一人一人の考えていることや趣味嗜好等を見だし、ケアの提供方法や声かけが変化していききました。

私たちは、「コラージュ法」の効果・利点を考えました。

1. コラージュ作品を中心に、ご利用者と職員が向き合うことができる。すなわちそれは、お互いが自分自身に向き合うことである。
2. 情緒の安定・脳の活性化に有効であり、レクリエーションとして、ご利用者の心の声を聞くことができる。

そして、ご利用者ご家族にショート利用時の様子をお知らせする際も、コラージュ法導入後は、より具体的な内容のお知らせができるようになりました。

「コラージュ法」を導入してもうすぐ2年が経ち、現在は月2回実施しています。ご利用者も職員も、おなじみのレクリエーションになりました。コラージュ作品を仕上げることの達成感を味わい、作品を通して



会話が広がり、壁面へ掲示し作品展を実施しています。「コラージュ法」を楽しみにショートステイをご利用される方もいらっしゃいます。

また、職員勉強会にも取り入れられ、職員のメンタルヘルスにも一役買っています。

今後も、「コラージュ法」を筆頭に、新しいレクリエーションを発掘し、よりよいケアが提供できるよう、努力をかさねていきます。

「今、幸せです」 ～少しでも笑ってほしい～

特別養護老人ホーム 西之島の郷

ユニットリーダー 窪 野 光 夏

ユニット職員 渡 辺 輝 彦

旦那様が亡くなられたことをきっかけに精神疾患を伴い、栄養がとれず医療保護入院となったS様（72歳女性）は、症状が少し落ち着いたところで2年半前に西之島の郷に入居されました。入居当時は言葉かけをしても無反応・無表情の時間が多く見られていました。また行動障害として車いすをバックで走行して壁にぶつかる姿が見られ、怪我をされることもありました。食事を安定して摂取することができなかったり、早食いで嘔吐が見られたりしました。そのようなS様を見て私たちは、「一瞬でも楽しいと思ってほしい」、「少しでも笑ってほしい」、「本来のS様に戻ってほしい」

と思い抗精神薬に頼るのではなく、多角的な視点から職員全体で支援にあたりました。

まずは信頼関係を作っていく為に、職員間で関わり方を統一しS様の気持ちを尊重する関わり方を行い、関係が出来てきたところで本人が希望することを聞き取りました。それをもとにクラブ活動への参加、S様が関心のある食に対する支援、そして外出の支援等行いました。できる限り制限をかけず、定期的に旦那様のお墓参りや自宅に戻る支援を続けることにより、精神的な安定が図れるようになっていきました。

このような支援を行っていくことで、S様から徐々に笑顔が見られるようになっていきました。入居したばかりの頃は、「いつ死んでもいい」と無表情で言われていましたが、今では「西之島の郷に入って楽しい、ここに入って良かった」「今、幸せです」などと笑顔で言われています。また栄養状態も改善し入居時から現在の2年半で11kg増加、要介護度が5から1へと変わりました。

支援にあたるうえで最も大切にしていることは、何があっても最後まで入居者の事を考え、入居者の為になる支援をしていこうという職員の諦めない心だと思います。この気持ちを大切にしてS様だけではなく全入居者が本当に望んでいることを知り、より良い生活を送ることができるような支援をしていきたいと思えます。

表情の変化

入所当時



現在



施設内研修について ～研修に参加しやすい工夫～

特別養護老人ホーム 晃の園

介護主任 松林理絵

今までの施設内研修は、大人数を相手に講義をする研修スタイルであった為、講義をする側からすると1人1人の様子を把握しづらく、受ける側も身が入らず、参加することが目的となっていました。

まずは、研修スタイルを見直しました。小さい部屋で2～3人を相手に行う方法をとりました。1人1人の顔を見ながら、近い距離で伝えるということに大切にした研修スタイルです。その中で、グループワークを行い、職員同士で会話する機会も設けています。

次に、研修を計画的に行えるよう年間計画を立てました。全員参加の研修や新人、2年目、3年目、ユニットリーダー、非常勤と経験年数や勤務形態、役職別で研修が組まれています。

次に組織の仕組みとして人材育成課という部署を作りました。人材育成課はケアの質、職員の質を確保する為にトータルでマネジメントする課です。職員の力量チェック表の効果を確認したり、研修の年間計画もたてています。年間計画に入れる研修内容は、身体拘束、顧客満足度調査、研修開催時等のアンケートや委員会、会議の場から主に吸い上げています。問題だけでなく課題や良くしていきたい点も計画に反映しています。

3つ目に、研修手帳を作りました。これは、私たちの施設独自で手作りしたものです。研修がある度に手帳を持参し、書きこんでいくことで、自分が参加した研修が把握出来、自己管理ができるようになりました。研修への参加が積み重なっていくと、後から見返した時に、成果が目に見え、職員の自信にもつながりました。

これらの取り組みを行い、多くの研修が効率的に開催出来るようになり、参加する職員にあわせた研修が可能になりました。無理のない参加が可能になり、現場に関係した研修が組まれることで、職員も意欲的に参加出来、それがケアに生きてくるようになりました。



特集 2

「介護の日」街頭啓発活動について

「介護の日」は、介護への理解と認識を深めていただくための日として、平成20年7月に制定されました。今年度も各支部において街頭啓発キャンペーンを実施しましたので、その状況を報告します。

東部支部

「介護の日」啓発活動

毎年恒例になりました「介護の日」街頭啓発活動ですが、今年度は11月11日（火）15時30分よりJR三島駅北口に東部支部会員と介護福祉士会の方々にもご協力を頂き、総勢約60名にて実施しました。当日は朝から雨が降っていましたが、開始時間前には心配された雨も上がり珍しく虹が現れました。

県老協石川会長、県老協安本事務局長参加の中で東部支部木下支部長の挨拶の後、メインキャラクター「ケアットちゃん」と共に三島駅北口・南口に分かれ街頭キャンペーンを開始しました。道行く学生さんからサラリーマン、旅行者等と大勢の方々にキャンペーングッズを配り介護の日のピーアールをしました。用意していたグッズも30分程度で無くなりました。グッズを手にとって下さった方々に、介護について身近に感じて頂き、理解と認識を深めて頂く機会になったと思います。

東部支部の各地区において介護の日に合わせて、それぞれ独自に活動を行なっています。土肥ホームがある伊豆市では市内の特養3施設が協力し、12月7日に伊豆市生きいきプラザ大ホールにて「介護の日記念イベント」を開催しました。開催に当たり市民の方々に広く介護について感心を持っていた頂けるよう、市内の高校にも協力を頂き、介護川柳応募・当日の運営ボランティアを依頼しました。また落語家の三遊亭楽春



さんを招き、「笑いに学ぶ介護予防」と題して講演をして頂きました。伊豆市以外の地区の活動についてもいくつかご紹介します。伊豆の国市では市内の特養3施設が協力し、11月12日に韮山時代劇場大ホールにて「介護の日イベント」を開催し、医師の石飛幸三氏を招き講演をして頂きました。沼津市では市内の施設が協力し、11月14日に沼津駅北口にてキャンペーングッズを配布しました。

このような活動を通じて介護の輪が広がることを期待します。

（記 特別養護老人ホーム

土肥ホーム 施設長 木下高次）



中部支部

「介護の日」街頭キャンペーン

「いい日、いい日、毎日、あったか介護ありがとう」をテーマに定められた介護の日の11月11日。今年も中部支部では15時からJ R静岡駅北口の地下道にて、「介護の日」街頭キャンペーンを行いました。

広く市民に向けて「介護」に対する理解と認識を深めていただくこの啓発活動も、今年で7年目となります。

今回も会員施設の施設長や職員の方々が集まり、また介護福祉士会の皆さんの協力も頂いて、約40名が参加。老協協のオリジナルマスコット「ケアットちゃん」が活動に華を添え、道行く市民の皆様に配布物のカー

ドケースを配りました。

小学生から高校生、サラリーマンに高齢者まで、幅広い年代の方々が大勢行き交う中、「今日は介護の日です。介護にご理解ください。」と笑顔で呼び掛け、用意された配布物は30分程で配り終わりました。

配布物を手に取った方たちが、それぞれ介護のこと、自分の家族のこと、将来のことを少しでも考える機会となれば良いと思います。

(記 特別養護老人ホーム

こもれび 施設長 池田 達哉)



西部支部

「11月11日」この日何の日？

11月11日は、何の日か知っていますか？この日は、厚生労働省が介護について理解と認識を深め、介護従事者、介護サービス利用者及び介護家族を支援するとともにそれらを取り巻く地域社会における支え合いや交流を促進する観点から「介護の日」を平成20年7月27日に「福祉人材フォーラム」において発表されました。また、11月11日になった理由は、「いい日、いい日、毎日、あったか介護ありがとう」を念頭に「いい日、いい日」にかけて、覚えやすく、親しみやすく願いを込めて11月11日に選ばれたそうです。

高齢化などにより介護が必要な方が増加している一方介護への課題は多様化しています。

そんな中多くの方に介護をもっと身近なものとして感じて頂けるよう、知っていただけるよう広報活動の一環として、今年度も「啓発街頭キャンペーン」をJR浜松駅北口前にて実施致しました。福祉施設関係者及び介護福祉士会関係者総勢70名の参加により「介護の日」のPRとキャンペーングッズ2,400個を配布しました。悪天候にも関わらず、道行く人たちも足を止めて快く受け取って下さり心通うひとときでした。また、ボランティアの観光案内の方が「こんな日があることも知っておかなきゃなあ」と「介護の日」について教えてほしいとのひとこまもあり、有意義な啓発キャンペーンが実施できたと思います。メインキャラクターのケアアットちゃんも花を添えて、「介護の3Kは、感謝、感激そして感動です」をアピールしてくれました。

これからの将来を地域社会、関係団体、関係する事業者等々でともに支え合っていける社会にするために、また「いい日、いい日、毎日、あったか介護ありがとう」と思える日々が過ごせるよう更なる普及活動に取り組んでいきたいと思っています。

(記 ケアハウス

あんしんの里 施設長 大井久美子)



「地域と育つ萩の花」

ケアハウス 紅紫萩

施設長 松本 育

医療技術の進歩と食生活の向上、高齢者の健康に対する意識の向上により我が国は世界有数の長寿国となりました。私自身、人生の後半を社会との繋がりを持ち役に立って生きていくには何をしたらよいだろうとの思いの中で設立したのが、社会福祉法人 紅紫会でありケアハウス紅紫萩であります。

「紅紫会の名称に込められたもの」「いかなる環境にも適応し紅紫色に輝く萩の花の様に嫋（たお）やかに強く生きよう。」との思いを込め紅紫萩が誕生致しました。（平成3年8月）

必要にせまられて5年後にデイサービスセンター、在宅介護支援センター、ヘルパーステーション等の入る新館の建設と同時にケアハウスの増床を致しました。介護保険制度が始まり入居者が施設を選ぶ時代となり特養「萩の花」を14年にオープン致し職員も一挙に60名程増えて賑やかになりました。18年、高齢者や家族が不安を抱く事のない様に住みなれた地域や家庭で暮らしていける様な地域福祉介護サービスをめざして老人保健施設「ナーシングホーム オンフルール」を同敷地内に開設することにより高齢者福祉のエリア

が整備され医療と福祉が相互に有机的に関連をもち実践的な活動を展開することになりました。名称「オンフルール」の由来はフランス西部ノルマン



ディ地方の小さな港町の名所から名付けました。人生に安らぎとのおいを求めて寄港していただき元気になって、また出航していただく様にとの願いから…。

今、ケアハウスから10名程が寄港してリハビリに励んでおります。ケアハウスの入居者から特養「萩の花」と「オンフルール」が出来て心安まる思いです。の声が聞こえてきます。

職員には「福祉の仕事は、政治経済がからむ今の社会における一番大切な仕事であり、その第一線の仕事を皆さんは日夜努力して下さっているのですよ。」と讃え励まし、私も何がしか社会の片隅で人様に役立っているのかなと思いながら周辺の濃い縁と澄み切った青い空の下、美味しい空気を吸って紅紫萩で働いております。

シリーズリレーコラム

一雑感一

特別養護老人ホーム 岩本園

施設長 渡邊 睦

平成27年。私も60歳を迎えるに当たり、自分の原点を振り返ってみた。

始まりは昭和54年4月、大学時代は精神医療ケースワークを中心に学んできたが、若狭湾沿いの京都北部の某特養に、縁合って就職して富士に来るまでの5年間。

カトリック教会を母体とした法人で、修道院が隣接しており、シスター（修道女）が施設長。介護の経験の無い私は、とにかく1年間離床・排泄・入浴介助を他の寮母さん（特に経験の長い50代の）より認められる、上回れるように出来なければと必死に過ごし、介護は気を合わせる事を感じ、2年目よりケース記録の指導・外出計画等が出来るようになり、又「呆け老人をかかえる家族の会」（現在の「認知症の人と家族の会」）の市内発足に関わり、電話相談窓口を特養内に設置。ボランティアグループの定期的な施設での活動（奉仕作業と言っていた）があり、市社協ボランティアセンター委員等様々な地域福祉活動にも関われるように。3年目にリハビリ病院へ3ヶ月実習を経験……。特養の費用負担は、この5年間に、無料から一部負担へ、

そして家族負担も加わる形へと変遷。

入居者の90%以上の方が入居後信者となり、毎週「ミサ」が行われ、殆どの方が出席。私も夕べの祈りとして使徒信経等を放送し、暗唱できるようになる。入居者の中にはマリア像の前で「南無阿弥陀仏」と唱える方もいる。「それでいいのよ」と施設長。看取りも、宗教色は濃いものの、実践していた。亡くなると家族がお寺で仏式の葬儀。身よりの無い方が病院で亡くなった場合は、私一人ワゴン車で病院へ迎えに行き、故人と2人で施設に帰る。神父さんが来て、葬儀を入居者全員参加で執り行う。斎場は薪での火葬で、翌日のお骨拾い。焼き釜からそのまま出すところから立ち会い、現在よく見られるような砕けたお骨で無く、その方の体型がよくわかるお骨で、「おんぼさん」（差別用語とされていますがご容赦下さい）と呼ばれる方が、骨の変形した形や黒くなっている骨の部分から、故人の病気や苦勞されたと思われること等を説明してくれた。喉仏は文字通りの形が綺麗（？）に見えた。

このあつという間の5年間で、地域福祉の関わりも、死生観も、介護技術も、今の私の礎として、否、そのままの考え方があるように感じる。



岩本園では家族がいない方、遺縁で葬儀ができない方は、円照寺さん（富士市須津地区）に墓石を建て、永代供養（戒名有）させていただいています。（写真中中央付近の長方形の墓石です）

●施設のユニーク行事●

福祉介護クッキング講座

「おやつづくり」で介護疲れを癒して

私どもの施設では、地域との連携事業の一環として地域の方々やご利用者のご家族に普段の介護等の疲れを癒していただくことを目的に、年に2～3回、福祉介護講座という名目で寄席、料理教室、マンドリンコンサート、プリザーブドフラワーアレンジメント講座など多彩な行事を実施してきております。

最近実施したなかで、福祉介護クッキング講座 ～子供からお年寄りまでおいしく食べられる簡単おやつづくり～をご紹介します。



参加者からは、協力してやることを学んだ、好き嫌いのある子供も一口食べることができた、家でまた作ろうという声も聞かれ、家族のコミュニケーションを深める場にもなるなど有意義な時間を過ごしました。

特別養護老人ホーム あすか
施設長 河野良明



講師は、管理栄養士の塩沢春美先生。参加者は、ご利用者ご家族、地域の親子の皆さん30人以上で、小倉蒸し羊羹、お茶入り白玉豆腐、カボチャ白玉豆腐、白玉豆腐の安倍川づくりに挑戦しました。

講師からの『「食事をするための4原則（食材を用意→調理→美味しく食べる→片付け）」や、嫌いなものでも一口は食べる勇気、主食（ご飯、パン、麺類等）はすぐにエネルギーになるもので摂らないと飢餓状態になりダイエットには良くない、おかずは（お数）「数を揃えることがおかず」であり多くの食材をまんべんなく適量に摂ることが重要、おやつ（副食）は「心の栄養」、午後2時～4時が血糖値が最低になり、おやつを摂るには一番身体に良い時間帯』などといったわかりやすく楽しい講和を聞きながら、大人はもちろん、ちいさなお子さんも目を輝かせ、楽しく一生懸命に取り組みました。



活動報告

【老施協】

- ★26年10月21日 県（福祉長寿局）との懇談会を、「県政さわやかタウンミーティング」を兼ねて県総合社会福祉会館にて開催、老施協からの「質問・要望等」を中心に意見交換（企画経営委員会担当）
- ★26年11月11日「介護の日啓発事業」として、東部（JR三島駅）、中部（JR静岡駅）、西部（JR浜松駅）において県介護福祉士会と協働して、それぞれ街頭啓発キャンペーンを実施
- ★理事会 26年12月9日、全国老施協代議員選挙等について協議、また、各委員会の活動状況等を各委員長が報告

【研修委員会】

- ★26年11月13日 介護の日イベントとして「平穏死という言葉が生まれたわけ」をAOIで開催。参加者174名（特養委員会共催）
- ★26年12月22日 介護力向上研修「灯光園における全員常食の取り組み」を静岡商工会議所会館で開催。参加者101名

【21世紀委員会】

- ★26年10月16日 第6回委員会を開催。グループディスカッション「各施設の職員研修の内容・方法等について」、事業計画等を協議
- ★26年11月20日 天竜厚生会 山本たつ子理事長を講師に第7回委員会を開催。「社会福祉法人及び施設運営について」実践的なお話を受講
- ★26年12月19日 第8回委員会を開催。「施設内の職員交流など、福利厚生の取り組みについて」グループ討議

【高齢者福祉研究大会実行委員会】

- ★26年11月21日 正・副委員長の選出。第7回研究大会素案、第8回大会の会場等について協議

【養護委員会】

- ★養護老人ホーム実態調査の取りまとめ・編集

【特養委員会】

- ★特養施設 入所状況・待機状況調査の取りまとめ

【在宅委員会】

- ★デイサービスセンター利用状況調査の取りまとめ、編集

【軽費委員会】

- ★軽費委員会老人ホーム実態調査の取りまとめ、編集、調査報告書の発行
- ★26年11月26日 栄養士研修会を開催、20施設が参加
- ★27年1月8日 委員会を開催



編集後記

富士山女子駅伝が昨年から富士・富士宮市で開催され、当法人の地域包括支援センターの前がコースとなっております。今年は12/23に開催され、ほぼ無風の晴天で、富士山もよく見えました。施設やデイサービスのお年寄りも応援に参加し、当法人では無料のコーヒースerviceを振る舞い、盛り上がりました。皆さん、よいものが見れたと大変満足で、今後も継続をお願いしたいものです。（大塚）

今年度から障害者委託訓練を受託し、3名（身体、知的、精神）を雇用した。この3名に共通しているのは、素直で真面目で一生懸命働くことである。

シーツ交換、居室の清掃、短期入所の荷物チェックを担当し、どの顔も生き生きと輝いている。

この笑顔の裏には職員たちの優しさと温かい労いの声かけがあることも忘れてはならない。（福原）

昨年はどんな一年だったでしょうか。42号が発行される頃には皆様のまちの第6期介護保険計画が策定されていることでしょう。

軽度者が介護保険から削られてくる中、市町村での取り組み状況はいかがでしょうか。社会福祉法人の地域還元、地域貢献を強化し評価される時代になってきたことを実感します。（花木）